

第二十一組 第五回 「推進員の集い」 講話録

二〇一八年十二月五日 難波別院 堺支院にて

南無阿弥陀仏で
本当に救われる？

― 救われるとはどういうことか ―

お話

澤田 さわだ

秀丸 ひでまる

先生

第十二組 清澤寺 前住職



三歸依文 さんき えもん

人身にんじん受け難がたし、いますでに受く。仏法ぶつぽう聞き難がたし、いますでに聞く。
この身み今生こんじょうにおいて度どせずんば、さらにいづれの生しやうにおいてかこの
身を度どせん。大衆だいしゅうもろともに、至心ししんに三宝さんぼうに歸依きえし奉たてまつるるべし。
自らぶつ仏に歸依きえしたてまつる。まさに願ねがわくは衆生しゆじやうとともに、
大道だいどうを体解たいげして、無上意むじやういを發おこさん。
自ら法ほふに歸依きえしたてまつる。まさに願ねがわくは衆生しゆじやうとともに、
深きく經藏きやうざうに入りて、智慧海ちえのごとくならん。
自ら僧そうに歸依きえしたてまつる。まさに願ねがわくは衆生しゆじやうとともに、
大衆だいしゅうを統理とうりして、一切いさい無碍むげならん。
無上むじやう甚深微妙じんじんみみょうの法ほふは、百千万劫ひやくせんまんこうにも遭遇あいあうこと難かたし。我われいま見聞けんもんし
受持じゆじすることを得たり。願ねがわくは如来にがうの眞實義ぎを解げしたてまつらん。



「三帰依文」を唱和します。

―三帰依文唱和―

「処」でないという意味がない

皆様もテレビをご覧になるでしょうが、時代劇でよく峠の茶屋という風景が出てきますね。旅をしている人が床^{しょうぎ}几に座ってお団子を食べたりお茶を飲んだりしている。昔のドライブイン^{どらいういん}っていうのでしょかね。その脇には竹の棒がシュツと立っていて、先には「休み處^{どころ}」って書いた旗がひらひらしています。やはり時代劇ですから「處」は旧漢字が使われていますが、今の当用漢字では「処」という字になります。ですから今の字で書けば「休み処」となります。

私はそれを見ましてね、旧字はともかく「あれっ、何で『所』にしないのかな」と思いました。だけどこれ、やっぱり「処」でないと意味がないのです。「所」ではダメなのです。こっちの「所」はありどころを表します。一丁目の一番地つていう場所です。だから住所って言います。お寺はここにありますがということを表すのが「所」であって、そのありどころを指すのです。

対して、こっちの「処」は違う意味があります。これ左側は、冬頭^{ふゆがしら}と言って人

間が歩いてゐる姿なのです。歩いてゐる人はやがて疲れる。歩き疲れたらどうするかというと、木を切った後の切り株に、腰を下ろして一服するという字なのです。だから落ち着く処つていう意味です。

さて、私たちは何丁目の何番地かに住んでいますが、住んでいる所が落ち着く処になつてゐるでしょうか。

テレビを見ておりましたら、どういふいきさつか知りませんが子供たちだけが収容されている施設がありました。施設へ入らないといけない理由が何かあるのでしょうか。もしかしたら家庭に何か理由があるのかもしれませんが。

アナウンサーが小さな子どもに「ここでの生活はどうですか？」つて聞いたのです。そしたらその小さな子どもが、何とも言えない嬉しそうな顔をして「お友達がいて、先生は優しいからここはいいところ」と言つてゐるのです。本当のお家でないから落ち着かないはずなのです。だけど今自分の居るところが全く私の落ち着く処になつてゐます。

私たちの人生もそうです。人間に生まれてきて人間に生まれてきた尊さを「^{じん}人
身受け難し」と先ほど「三婦依文」で唱和しました。じゃあ人間に生まれてきて

本当に良かったのか。喜んでいるとしても、いったい何を喜んでいるのか。私には、きちつと帰る場所があるのか。ただ、ふらふらうろうろして一生を終わろうとしているのじゃないだろうか。ここへ帰れば必ず私の気持ちが落ち着く、そういう「よりどころ」があるのだろうか。こういうことを私に問うている「ところ」がこの「処」なのです。

憂^{うれ}い悲^ひしみが潜^{ひそ}んでいる

人間に生まれてきた私たちは、素晴らしい知恵をだして素晴らしいモノを作ります。教育も経済も文化もみんなこれは人間の喜びを求めて努力しているのです。しかし考えたら皆さん、人間が作り出した喜びというのには必ず憂い悲しみが潜んでいるでしょう。福島で原子力発電所ができました。そのときに発電所のある町の入り口に大きな看板が掛けられて「原子力明るい未来のエネルギー」と書かれました。明るい未来のエネルギーである原子力発電所が私たちの町にできた、という喜びの看板です。

だけど今は悲慘たるものです、みんな地震で疎開をして未だに帰れないのです。

これは地震の問題じゃ無くて人間の作りだした原子力発電という科学の問題なのです。人間の作り出したものには必ず憂い悲しみが潜んでいるのです。

「^{らく}楽」に三種あり

そういう私たちが人間に生まれてきて得ていく喜び、この喜びを仏教では「^{らく}楽」といいます。そんな人間の喜びと、仏法で説く喜び、この違いを曇鸞様というお坊さんが教えてくださっています。

曇鸞様というお坊さんは、中国で念仏を喜ばれた念仏者です。親鸞聖人は、浄土真宗をご自身に伝えてくださった七人の高僧の一人として数えられています。「^{しょうしんげ}正信偈」にも「^{ほんじどうらん}本師曇鸞」とこう謳われてあります。

曇鸞様は中国の方なのですが、聖徳太子が生まれられるちよつと前に亡くなつていらつしやいます。聖徳太子は西暦の五百七十四年に誕生されていますが、それより三十年ほど前に亡くなられたのです。

曇鸞様がお書きになりました代表的な本を『^{じようどうろんちゆう}浄土論註』といいます。この『浄土論註』中で「楽に三種あり」とおっしゃっています。これを親鸞聖人は非常に

尊いお言葉だというので、親鸞様がお書きになられた『教行信証』きょうぎょうしんしやうというご本の「証卷」しやうのまきという中に、曇鸞様のお言葉そのままに引用されています。

一つには外樂げらく

まず「樂に三種あり。一つには外樂げらく、謂いわく五識ごしき所生しよしやうの樂なり」（『真宗聖典』P295）とあります。ちよつと難しいですが、五識というのは、五つの人間の持つてゐる知り分ける力、物事を判断する力です。「外樂」とは、この五識によつて生まれてくるところの樂だとおっしゃるのです。

五識とは、外にある喜びを私が「わー」とよろこぶ喜びなのです。これには道具がいます。例えば、桜の花が綺麗に咲いていて「わー綺麗！」と喜ぶのには、眼を通さないとダメでしょう。「眼」それが五つの意識の一つです。

五識とおっしゃるのですから五つあるのです。眼を通して喜ぶ他に何がありますか。

（会場から）「匂い」。うん。匂いにはいい匂いと悪い臭いがありますが、何を通すのですか。桜の花は眼を通して綺麗だなーと思う。匂いは何を通すのですか。

（会場から）「鼻を通す」。そう「鼻」、他には。本当はお釈迦様がおつしゃる順番で言ってもらうと一番ありがたいのですがね。

（会場から）「耳」「聞く」。いい音楽だなあと聞く。落語を聞いて悦ぶ。聞く。道具は「耳」ですね。あと二つあります。

（会場から）「味わう」「口」。口と言う人が多いのですが、口はあんまり賢くないのです。口は入れたものがこぼれないように作つてあるだけ。そうじゃなくて「これもうちよつとお酔が効いていたらいいのになあ、これは甘い美味しいおぜんざいだな」て感じるのは何ですか。

（会場から）「舌」。そう「舌」。それから？

（会場から）「手」。うーん。では足は？ということになる。そうじゃなくて例えば「今日は暖かいね。いい風だね。良い日差しだね」というのは舌だして感じますか？あるいは目をむいたらいいですか？体ですね「身」です。手も足も含めて「身」です。

この五つを仏教では、眼（げん）・耳（に）・鼻（び）・舌（ぜつ）・身（しん）と読むのです。これが非常に優れていますから、ここへ根という字を書いて五根（ごこん）ともいいます。これがだいたい世間にあるものを私が喜ぶ道なのです。「外楽」

というのはその喜びです。この五識の私たちの道具を通して私たちは喜んでいきます。温泉につかって喜ぶのもみんなこれなのです。

二つには内楽ないらく

さて、曇鸞どんらん様は「二つには内楽ないらく」とおっしゃいます。これは曇鸞様の使われたお言葉でいただいたら「意識いしき所生しよしょうの楽」です。意識（心）の中に受ける喜びという意味です。

私はテレビをほとんど見ないのですが、それでも、去年の年末にニュースを見てびっくりしました。中学生の子供が高等学校へ入るための塾に行っているその生活ぶりにです。十二月の三十一日まで塾へ行くのですね。塾の休みは元日だけです。もう一日から塾へ行きます。凄まじい生活ですね。遊ぶ時間なんて全くない。だけど、アナウンサーが「冬休みも、お正月の休みもないのですか？遊びたくないですか？」と質問したら、一人の中学生がにっこり笑って「でも、分らなかった問題が分かった時は嬉しいよ」と言うのです。

この喜びが「内楽」です。外は一見厳しいのです。どう見ても喜びが無いよう

に思える。でも、中は違うのですね。分からなかった問題が解けたときは何とも言えない嬉しさがあるのです。中には、燃ゆるような喜びがあるといえるのです。これが、曇鸞様が心、つまり「意識より所生の樂なり」とおっしゃる内容なのです。

それは「法樂」

もう一つ、三種ありとおっしゃるからもう一つあります。それを曇鸞様は「法樂の樂」とおっしゃいました。この樂について曇鸞様は「いわゆる智慧所生の樂なり。この智慧所生の樂は、仏の功德を愛するより起これり」と述べられています。ここでおっしゃる「智慧」は仏様のさとり智慧のこと、また「功德」とは仏様の成し遂げられた勝れたはたらきという意味です。いわゆる仏法に親しむことのでいただく喜びなのです。すなわち仏法からいただく喜びです。

先の二つ、「外樂」と「内樂」は、「三帰依文」で言えば「人身受け難し今すでに受く」でいただく喜び。三つ目の「法樂の樂」は「仏法聞き難し今すでに聞く」の喜びなのです。

桜の花を喜んだり温泉につかって喜んだり、体は厳しいけれども心の中に生れ

る喜びは、人間の努力によってどんどん作られていくのです。政治家に良い政治をしてもらったらこの喜びが増えます。お金が豊かに回れば経済が豊かになって、この喜びも増えていきます。これは人間の喜びなのです。

しかし、この「外楽」「内楽」には二つの問題があります。

一つめは現在だけを対象にした喜びだということです。常に変わらずにある喜びだとは言えないのです。私のお寺に一本の紅葉もみじがあります。けっこう毎年、紅葉して綺麗です。私の部屋が二階にありますので窓から見ると、とても綺麗です。だけど今年はさっぱりでした。あの厳しい暑さでもう枯葉のようです。紅葉は木の幹が弱いですからね、幹に太陽が当たるとガックリと弱ってしまうのだそうです。

去年は喜べたけれど、今年は喜べない。見れば見るほどがっかりするのです。「外楽」「内楽」は、常にあるとは限らないという、問題を抱えているのです。

二つめには直覚ちよっかくによっていただく喜びだということが問題です。直覚とは、自分の感じたこと、つまり感覚です。

桜の花を見ても、そんなに喜ばない人っているじゃないですか。皆さんは、紅葉を見に行かれましたか。何を隠そう、私はわざわざ観光バスに乗って一日時間をあけて紅葉を見に行くというのが、どういう心持ちかよく分からないのです。

実は私、紅葉とか花見とか特別に行ったことがないのです。あれは、やつぱり喜ぶ人が行かないとダメですね。私みたいにひねくれた者は、せっかく観光バスで行っても嬉しくないのです。

その人によって違うのです。その人の感覚によって違ってくるのです。皆な同じように感じるということは無いのです。

本当の喜び「ごくらく極楽」

それに対して仏法からいただく喜び、「ほうがく法楽の楽」を「ごくらく極楽」と言います。

極つていう字は、亟だけでもゴクと読むのです。亟の字一つで意味があるので。これは皆さんのお家の辞典にちゃんと書いてあります。端から端までという意味があるのです。

端から端まで通っている木を知っていますか。鉄筋コンクリートの家はダメで

すが木造の家には、必ず一端から端まで通っている木があります。何の木ですか。もし皆さんが木造に住んでいたら必ずあるのですよ。

（会場から）「通り柱」。

（同じく会場から）「梁^{はり}」。そう梁が正解です。あれは一本で端から端まで通っているのです。床の間の柱は天井裏で終わっています。だけど梁は端から端まで通っている。

本当かなと思ったら今日お家に帰って天井裏覗いてみてください。途中で足さない。途中で途切れない。一本すうっと通って、しかもその梁は家の中の一番高いところにあるのです。梁の上はもう屋根です。そういえば「極上」は、「この上のない」の意味でしょ。極上の鰻^{うなぎ}井とかね。「極」とは「端から端まで通ることの上ない」という意味です。

今、私がいただいている喜びが人生を貫いてあの世まで続いていく喜び。それを本当の喜び「極楽」というのです。これが「法楽の楽」なのです。だから、温泉へつかったぐらいで極楽って言わないでくださいね。あれは、ひと時のつかの間の喜び。「極楽」は、今ここで喜んでいることが私の人生を貫いてあの世まで届いていくのです。

この世とあの世を貫いた喜び

「三帰依文」で、そういうことですよ。頭の「三」は、仏法僧の三宝ぶつぽうそうさんぽう、それは、仏様（仏）と仏様の教え（法）と、それを喜ぶ人々、ここにいるお仲間（僧伽さんか）です。「帰依きえ」とは、死して帰る世界。依は生きて拠り所となるもの。今ここで私の生きて拠り所となる、頼りとなる、あるいは力となる、その世界へ私たちは帰っていくのです。帰っていく世界が、そのまま今この力なのです。

今この力、喜びがそのまま帰る世界。そんなものにありますか。たとえば、お金は貯めれば貯めるほど、死ぬに死ねない心境になるのじゃないですかね。私は貯めたことないから分かりませんが。あるいは、健康が大事だと、健康だけをつかんでいたら、死ぬことを忘れるのです。死ぬことがいよいよ怖くなるのです。

今私たちがつかんでいる幸せは、つかめばつかむほど死ぬに死ねないのです。金さん銀さんがご存命の時は、皆さん観光バスに乗って金さん銀さんのお宅まで見に行かれたのですよ。ところが亡くなれたら、ほったらかし。誰も行きません。何度も言いますが、三帰依とは私たちが死して帰る世界です。しかし、それが

そのまま生きて喜ぶ力になるのです。この時に、生きていることと死ぬこととは一つに繋がっています。これが本当の喜びなのです。「極楽」とは、この世とあの世を貫いた喜びなのです。

これに対して、「外楽」は何度喜ぶ材料を作っても、それは所詮生きている間だけのものなのです。死んだら間に合わない。それは喜びには違いありません。本当の喜びではないのです。

必ずどこかに喜びがある

同朋新聞という真宗大谷派の新聞に、こういう歌がありました。「目を病めば匂いで見よと 梅匂う」。読まれた人の名前を書いたメモを失くしてしまったのですが、この人は「目を病んで見ることが出来なくなりました」ということです。から、「外楽」が終わったのです。しかし「仏法を聞かさせていただいたおかげで花は見えないけれども、匂いをいただくことができました」という喜びの歌です。

もう一度読みます。「目を病めば 匂いで見よと 梅が咲く」、こういう喜びが

あるのです。普通でしたら、目が見えなくなったら「情けないなあ、何でこんなことになってしまったのだろう。もう死んだ方がましだ」と、人生全部が崩れていくのではないですか。だけど「法樂の樂」はそうじゃないのですよ。必ず仏法を聞かしていただいたらどこかに喜びがあるのです。私の力では気付かないけれども、どこかに喜びがあるのですよ。

仏法を喜ばれた人

昔、私が三十代で東本願寺にお勤めをしている時に、木村無相きむらむそうという方がいらつしやいました。

この方は、東本願寺の門を入ったところの守衛室で、守衛の仕事をされています。本当に仏法を喜ばれた人です。守衛室に座ってお仕事をされていたら、いろんな喜びがわいてくるのだそうです。それを歌にされました。その中の一つに「雪がふる 雪がふる 雪がふるふる 雪がふる 雪がふる 煩惱無尽ぼんのうむじんと 雪がふる

雪がふる 雪がふる 雪がふるふる 雪がふる 雪がふる 大悲無倦だいひむけんと 雪がふる」と詠まれました。

守衛室で、ちょこつと座って、窓越しに外を見られていたのでしょう。守衛室の窓ですから、見渡しが効くように全部透き通ったガラスです。そしたら雪が降ってきた「雪がふる 雪がふる 雪がふるふる 雪がふる」まるで腹立ちそねみの私の煩惱の尽きないことを教えるように降ってくる。また「大悲無倦と 雪がふる」。「大悲無倦むけん」というのは、阿弥陀如来様が飽きることなく、とどまることなく、休むことなく私たちにはたらくてくださっているそのおはたらきです。無倦とは、飽きることがない終わることはないという意味です。ですから木村無相さんは、天から落ちてくる雪を見ながら「はあ、これはまるで阿弥陀如来様の大悲の心が、私に降り注いでくださる姿や」とこういったのです。皆さん、普通なら、雪が降ると先に愚痴がでませんか。それで降り過ぎると腹が立つじゃないですか。それがちゃんと喜びに変わっていくのです。転じていくのです。実は、こういう人が沢山いらつしやるのですよ。

年取とったからいただける喜び

東大阪市で小間物商を営んでいらつしやつた榎本栄一えのもとえいちさんっていうおじいさん。

百歳で亡くなられましたが、この方も小間物商を営みながら非常にお念仏を喜んだ人です。

榎本さんは、生活の中で一杯喜びがわいてくる。その喜びを詠まれた歌に「昔は一日中店に立っていたが 今はじき腰かける 南無大悲の仏様 勘弁してください」という歌があります。「今はじき腰かける」とありますね、私だったら「年を取るのには情けないなあ、年は取りたくないな、昔は元気に動いていたのに情けないなあ」とこうなるのです。

それを「昔は一日中店に立っていたが 今はじき腰かける。南無大悲の仏様、勘弁してください。」と詠んでおられるのです。

皆さんこれはね、年取ったからいただける喜びなのです。「昔は一日中店に立って働いていた。その時は立ち尽くされる阿弥陀様が贅沢に見えた。ワシらはこんなに忙しく立ったり座ったりしやがんだり、それに比べて阿弥陀様は結構なことだ、じつと立ってたらいいのだから。ところが今、自分が立ったり座ったり出来なくなつて、すぐ腰掛ける身になつて気が付いた。私は『ああしんど』と腰を下してすむけれど、阿弥陀如来様は腰も下さずしやがみもせず、私に念仏を届けるために立ち尽くしてくださつておりました。その阿弥陀様のご苦勞を、腰掛ける

身になって初めていただいたとは、なんと横着なことでしょうか。南無大悲の仏様、勘弁してください。」と、いただくことができるのです。

「居眠りせずに仏法を聞く」の一点です

推進員になられた皆さんは、こういう榎本さんのお歌を、お声を、教えを聞いた上は「仏法聞きながら絶対に居眠りをしない」そういう人になってください。先ずそれが出来たら推進員です。推進員なんて何も難しいことなのです。「居眠りせずに仏法を聞く」この一点です。どうしてかという、阿弥陀様は立ち尽くして、私たちに「貫^{つらぬ}いていく喜びをいただいてくれ」とはたらいてお見えだからです。

今あなたが、科学や教育や経済の力で作った喜びは全部色あせて変わっていくのです。決して一生貫くものではないのです。若い時は嬉しかったけれど年とつたらダメ。健康な時は良かったけれども、病気をしたらダメ。そういうものばかりです。しかしその中で、今、私が推進員として聞かしていただいている仏法は、生きている間と死んでからを貫いているのです。

親鸞様はご和讃のなかに「信心よろこぶそのひとを 如来とひとしときたもう」と、おっしゃっています。「信心よろこぶ」つまり阿弥陀如来様のさとりのお言葉を心に聞いていただいて喜んでいる人は、さとりのお弥陀様のお言葉が、すなわち智慧が、私のなかに届いているのだから、その人はもうすでに如来と等しい人だとおっしゃっているのです。

等しいとは別々のものが肩を並べたということですが、如来様と同じだとはおっしゃっていません。確かに、仏法をいただいて喜ぶ。さとりのお言葉をいただいて喜ぶその喜びは如来様の喜びなのですから等しいのです。

しかし、体がある間は如来様と同じとは言えません。どうしてかというところ、体が文句をいうのです。体が愚痴の種になるのです。そうでしょ、皆さん。夏は暑いて知っているでしょ。でも「暑いなあ」と文句が出るのは体が言わすのです。だからこの体がある間は、私たちは仏様と同じとは言えないのです。

だけど阿弥陀様のさとりのお言葉をいただいているから「その人は如来様と等しい人だ。同じ資格の人だ。つまり、その御信心が仏になる種となつて、私たちはやがてお浄土に仏と生まれさせていただけると教えてくださるのです。これがこの世とあの世を貫いていく喜びなのです。

曇鸞様は、これを「法樂の樂」と言われて、樂に三種ありと抑えられます。仏法を聞いて、私たちはこの世の喜びに酔うのではなく、この世の喜びはこの世の喜びとして、しっかりと喜びながら、そこに潜む問題を気付かせていただいでいく。そして本当に貫いていく喜びに目覚めさせていただく、そういうことが非常に大切なことでないだろうかと思います。

四十分というお約束ですので、ここで終わろうと思います。
ようこそお聞きをいただきました。

合掌

本書は、2018年12月5日に難波別院堺支院（堺南御坊）
で開催された「第5回 第21組 推進員の集い」の澤田秀丸
先生のお話をまとめたものです。

この「推進員の集い」を開催するにあたっては、毎年、当
検討会で推進員と住職が本音をぶつけ何度も打ち合わせを行
います。その結果、第4回に引き続き「南無阿弥陀仏で本当
に救われる？」という、正直な思いをもう一度澤田秀丸先生
にお伺いすることにしました。

これに対し、先生は「救われるとはどういうことか」と、
丁寧な副題をつけくださり、生だけでなく死まで貫く救いの
事実を教えてくださいました。

それは堅苦しいお話ではなく、先輩方の具体的な生活を通
してのお言葉を数多く紹介された心に響くものでした。

このたびも、先生のお話を少しでも多くの方と分かち合い
たく冊子として取りまとめました。どうぞご一読ください。

最後になりましたが、本書の発行に御快諾いただきました
澤田秀丸先生に深甚の謝意を申し上げます。

2019年10月1日

推進員の活動に関する検討会

南無阿弥陀仏で本当に救われる？ 一救われるとはどういうことかー

2019年10月1日 初版発行

講 述
発行編集

澤田 秀丸

大阪教区第21組教化委員会

「推進員の活動に関する検討会」

事務局 〒593-8312 堺市西区草部79

真宗大谷派大阪教区第21組以速寺

組版・デザイン Tatsumaro Yamao



さわだ ひでまる
澤田 秀丸 師

1934 年 大阪府生まれ。

真宗大谷派仏教青年会連盟全国委員長、宗務所出版部長
山陽教区教務所長、姫路船場別院・広島別院・茨木別院・岡
崎別院・旭川別院輪番、同朋会館・総会所教導、大谷婦人会
本部事務局長を歴任。教誨師。真宗大谷派清澤寺前住職





真宗大谷派 大阪教区第 21 組教化委員会
推進員の活動に関する検討会